

『天草版平家物語』での分かち書き—「voite」考—

根 岸 亜 紀

はじめに

『天草版平家物語（以下、Feiqe）』での分かち書きについて、今までに「以って（motte）」について、一般的な使用形として主に「を以って（vomotte）」の例をみてきた^(注1)。今回は、「於いて」についてみていきたいと思う。

ここで、「を以って」の分かち書きについて、簡単に振り返ってみる。『Feiqe』で出てくる「～を以って」の用例は、前半部分では「を」と「以って」を分けて「～uo motte」と書かれていたものが、本文後半にいくほどに、次第に「を以って」が一語としてまとまっていき、前に来る語（部分）にも接続し、「～vomotte」という単位で使用されるようになった。これは、もともとは、助詞の「を」と連語の「以って」という別の語であったが、それが、「以って」が文中でよく「を」を伴って使われるという日本語の現状から、「を以って」という形が一般的となり、「を以って」がひとつの品詞として確立するまでになったためである。また、「を」に関しても、本来、常に前に語を必要とするという助詞の性質から、語中で使用される「uo」を用いていたが、「以って・motte」との熟語度が強くなったことから、「を以って」を一語として扱い、語頭に使われる「vo」を使用する「vomotte」となった。この現象は、日本人が話をするときには、前の語から続けて一気に「～を以って」と一続きにして用いる実際にも即していたであろう。このことから、『Feiqe』での分かち書きは、「日本人の口語における実際（現実）をそのまま切りとってきた単位であるといえるのではないか」と考えた。

今回は、その「を以って・vomotte」をふまえ、「於いて」の実際をみていく。方法としては、「を以って」のときと同様に、『Feiqe』本文の用例にあたり傾向を調べ^(注2)、当時の辞書や文法書にもあたりながら、「於いて」（「於いては」を含む）の分かち書きの様子をみていく。その際、前回みた「を以って・vomotte」を参考としていくこととする。

「於いて」の実際例に入る前に、「を以って・vomotte」の分かち書きの変化に影響を与えたものについて、「室町時代当時の日本人の使用する日本語の現状」

以外の側面から、少しみていきたい。

< 1 > イエズス会の日本語研究の影響

鈴木博著『室町時代語の研究』（五、一五九二年天草版『ヒイデスの導師』の諸問題 — 九、分かち書きについて）に、次のような記述がある（漢数字を改めている。また、下線は筆者によるもの）。

本書では格助詞の「が」「の」「に」「を」「は」などを直前の体言と一綴りにはせず、分かち書きにすることを本則としている。このことに関しては、本書の後に刊行された天草版の『平家物語』についての土井先生の調査がある。それによると、巻三の終わりあたり210頁前後までは分かち書きをしているのだが、その後（と序文）は続けて書くように改めている（『吉利支丹語学の研究 新版』56頁）。つまりイエズス会における日本語ローマ字綴りの、この点での方針の変更は、1592年の途中（遅くとも同年12月10日）なのであって、『ヒイデスの導師』は古い綴り方に、時期的に属していたのである。最初イエズス会がなぜこれらの助詞を離して書いていたかを想像するに、おそらく機能的にロマンス語の前置詞に近いと考え、一語扱いということで体言と切離して明確化したのであろう（「を以って」の場合に vomotte と一綴りにしているのも、これ全体で一つの前置詞のように見做したからであろう。cf. 山田孝雄博士『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』277-278頁。もっともこの考え方が徹底しているわけではない）。が、そのうちに日本語に対する観察が進み、日本語の膠着語としての性質に気づくようになって、これらの格助詞を体言と続けて記す方が、日本語として（読む場合、話す場合に）実際的であり、スマートであるとして続けるようになったのであろう（土井先生は前述の分かち書きの変更を、イエズス会の日本語研究における不断の成長性のあらわれの一つと認められた）。この点から見ても、本書はかれらの日本語学習のための初期産物と言えよう。

以前の報告で、「を以って・vomotte」の分かち書きの変化は、室町時代当時の人間の、使用の実際に即したものであったからであろうとしたが、それだけではなく、上記のような、イエズス会の日本語観察に基づく研究の成果（波線部分）も大きく影響していたといえるだろう。

また、『Feige』編纂当時の、日本語使用の現状も、大きな影響を与えていたと考えられる。次に、近代語への過渡期といわれる中世語の概略を少しみていきたい。

< 2 > 中世語による影響

『Feige』が編纂された室町時代周辺当時の日本語の様子を簡単にみしてみる。

日本の歴史の中で「中世」といわれる時代は、院政鎌倉時代・室町時代をとおり、日本語が「近代語」へ向かう過渡期であり、いろいろな変化をみせた。音便・拗音・語頭濁音などの発生と増加、漢語の飛躍的な増加、漢文訓読語法の多大な影響、人々の階層が分化し上下関係が厳しくなったことによる敬語の使用などさまざまである。また、文構造では、接続表現が多様化し、接続助詞も接続詞も新しい形が多くなり、主格助詞の明示にみる論理化も、近代語に近くなったことを示しているといえる（『中世語論考』山内洋一郎）。社会情勢や文化の影響もあり、これら多くの変化の特徴がみられた。

山内氏は著書のなかで、「院政鎌倉時代」のものとして、以下のような特徴を挙げている。

格助詞・接続詞に、次のような複合助詞が加わったのも大きな特色である。漢文訓読、和化漢文の用語が多い。

○ において によって をもって

○ といふとも といへども あひだ うへ ほどに

また、「室町時代」のものとして、以下のような特徴を挙げている。

接続助詞では、複合形が多種多様に頻度高く用いられたことに特色がある。形式名詞を持つものでは

ところに。ところで。ところを。ときに。ほどに。ために。

格助詞と動詞を持つものでは

において。によって。をもって。といへども。といふとも。

などがある。これらは全て連体形に付くものであり、同じく連体形接続の「が」「から」「に」をも併せれば、連体形による接続表現が多くなったといえよう。連体形といっても終止形を兼ねる形であるから、上句との切れめは微妙であって、文の構造を複雑にしている。已然形も接続表現を担う機能としては衰える方向にある。

中世における「漢語の飛躍的な増加」及び「漢文訓読語法の多大な影響」により、それまでは漢文のなかでしか使用されなかった形のものが、一般的にも使用されるようになった。

ここでは、「をもって（を以って）」の例も挙がっている。今まではあまり一般に使われることがなかったが、ここで漢文訓読そのままの形の「をもって」というひとまとまりの単位で使用されるようになったことがわかる。このことがそのままローマ字綴りにも影響し、「vomotte」というひとまとまりの形であらわすようになったとも考えられる。

また、ここで「を以って」と同様の例として、「於いて」を用いた「において（に於いて）」が挙がっている。「を以って」にならえば、「に於いて」のローマ字綴りもひとまとまりとなり、「niuote (nivoite)」となるのであろうか。

参考までに、「於いて」の辞書における記述を挙げておく。

『古語大辞典』コンパクト版

おい - て〔於て〕【連語】「お（置）きて」のイ音便→において

に - おい - て〔に於て〕【連語】「於」の訓読。「に」は格助詞。「おいて」は「置きて」のイ音便

時・場所・場合などを表す語を受けて下へ続ける。…に。…で。

「この事天下——殊なる勝事（しょうし）なれば、公卿詮議（くぎょうせんぎ）あり」<平家・一・二代の後>

「志ヲ合ワスルニヲイテワ [auasuruni voiteua]」何トシタ敵ニモ左右（さう）無ウトリヒシガルルコトアルマジイゾ」<天草版伊曾保・百姓と子ども>

語誌 「於」は漢文では日本語の「に」「を」「より」などに当たる助辞として使われる字であるが、また、「居」「在」などと同義の動詞として使われることもあって、その場合には、「おく」の訓があり得る。それで、これらに関連するの意の「於」を「において」「における」と訓むことから、「に」だけで十分な、時・所を示す「於」までも「において」と訓むようになった。従って、「において」は、漢文訓読語から一般化したもので、やや固い表現として、仮名文系の「に」「にて」に対応するものである。前田富祺

『角川古語大辞典』

おいて〔於て〕動詞「おく」に助詞「て」の付いた「おきて」の音便。置いた結果ある位置に存在する意で、助詞「に」を受けて助詞のように用いる。漢文における助字「於」の訓として成立した訓読語で、もと「うへに」と読まれたらしいが、平安中期以後に「おいて」に固定したという。和漢混淆文に多い。連体成分を作るときには「おける」と

なる。サ変動詞を伴って「おいてす」の形で用いることもある。

①事態の発生する場所を示す。

②事態の発生する時を示す。

③事態の主題を示す。助詞「は」を伴って用いることがことに多い。

また、「いはむや…においてをや」の形で用いることもある。…に関して。

④活用語の連体形、ことに助動詞「む」の後ろに、「においては」の形で用い、ある場面を設定する意で仮定条件を表す一つの型を作る。

『日本国語大辞典』第二版

おい - て〔於一〕【連語】（「おきて」の変化した語。漢文訓読において用いられ始めた。「…において」の形で、格助詞的に用いられる）

①動作、作用の行なわれる場所、時間などを示す。…で。…にあって。

②事物、人物などについて、それに関連することを示す。

イ) …に関して。…について。

ロ)（「は」を伴って）（他のものはとにかく）…に関しては。…にあっては。

③（「は」を伴って）仮定条件を示す。…の場合には。

語誌 格助詞「に」をともなう「において」の形は「於」を訓読した「ニオキテ」の音便形。「於」は平安時代から「ニオイテ」の他、「ニシテ」とも読まれ（その際、平安初期では、「於」は不読とされ、「ニシテ」は読み添えられる場合が多い）、「ニシテ」が主として具体的な場所を指すのに対し、「ニオキテ（ニオイテ）」は論理的・抽象的な関係を示していた。院政期頃まではこのような使い分けがなされていたようであるが、それがやがて場所・時間を表わす場合にも、「ニオキテ（ニオイテ）」が用いられるようになった。平安時代の和文では、「宇津保物語」「源氏物語」「浜松中納言物語」の男性の会話または手紙の中に用いられている。

『漢語林』

於（1）ああ。嘆息・感嘆の声。

（2）①助辞。訓読では読まないが、上下の語句の関係を示す。＝于（ウ）。

ア) に。句中にあって、方向・位置・時・原因などを表す。

イ) より。

甲) 句中にあって比較を表わす。

- 乙) 起点を表す。から。
 ウ) を。動作の目的を表す。
 ②おいて。…にあつて。句の上にあつて、方向・位置・時などを表す。
 ア) …における。対比の關係を表す。
 イ) 受身を表す。
 ③発語の助字。接頭語として用いる。
 ④おいてする。そこから離れない。

助辞としての「於」

- ①訓読では読まないが、上下の語句の關係を示すので、送りがなによつてその意味を表す。類義語=于。
 ア) 場所。…に。…へ。…で。
 イ) 対象。…に向かつて。…に対して。
 ウ) 時間。…までに。
 エ) 比較。…より。
 オ) 受身。…される。
 カ) 起点。…から。
 キ) 目的。…を。
 ②おいて。おける。…にとって。…において。
 ③ああ。詠嘆。ああ。

< 3 > 『Feiqe』本文中にみられる「於いて・voite」

『Feiqe』本文中の「於いて (於いては)」について、総索引を使い、すべての例を拾い出してみた。

於いて

巻	扉	序	第一	第二	第三	第四	目録
頁			3~92	93~155	156~224	225~408	目1~目6
計	1	4	4	2	1	2	2
~ ni voite	1		4	2	1		
~ nivoite							
~ni voite		2				1	2
~nivoite		2				1	

於いては

巻	扉	序	第一	第二	第三	第四	目録
頁			3～92	93～155	156～224	225～408	目1～目6
計			3		1	7	
～ ni voite ua			1				
～ ni voiteua			2		1		
～ni voite ua							
～ni voiteua						7	

(それぞれ、「序」には、三書合綴本総序・読誦の人に対して書す の両方を含む。)

上に示したのは、『Feiqe』における「於いて (於いては)」のパターンの分布である。本文中に出てくる例をみると、「於いて (voite)」単独で出てくる例はなく、それよりも「に」を伴って「～に於いて」の形で出てくる。その「に於いて」にもいくつかのパターンがあるが、ほとんどが「に」と「於いて」を分かち書きする「ni voite」の形で出てくる。

パターンの分布状況をみると、巻第一・第二・第三は「～ ni voite」という、前にくる語 (部分) と「に (ni)」も分けて書いている例がみられる。巻第四にいくと、「～ni voite/～nivoite」というような、前にくる語 (部分) に「に (ni)」が接続していくようになる。後半に行くにしたがって、語がまとまっている傾向にあるといえるだろう。この傾向は、「に於いては」も同様である。

また、序の部分に、巻第四でみられた「～ni voite」のパターンが出てきている。また、もっとも分かち書きの単位がまとまった「～nivoite」の例もみられる。この序の部分は、本文がすべて書きあがった後につけられたとする説がある。その説を考え合わせれば、序にみられるこの結果は当然といえるのではないだろうか。

本文後に付いている目録部分には、「～ni voite」の例がみられた。これも、巻第四の後に位置しているもののため、当然の結果といえるのではないだろうか。

なお、「を以って」の場合にも、本文前半は分かち書きの単位が細かく分かれていたが、本文後半に行くに従って、語がまとまる傾向がみられた。さいしょは、前にくる語 (部分) と「を」を分けて書いていたが、後半になると接続させて書くようになっていった。しかし、「を以って」でもっとも多かった分かち書きのパターンは、「を (vo)」と「以って (motte)」を付けて書かれた「～ vomotte」の形であった。

「に於いて」も、分かち書きのパターン分布状況は「を以って」と似ているが、「に (ni)」と「於いて (voite)」が付いた「nivoite」の形をとるものは、非常に少なく、出てくる場所もごく限られた範囲であった。

ちなみに、「を・お」の二種類の綴り方についてであるが、一般的に、「uo」は語中・語尾に使われ、「vo」は語頭に使われるとされている。

「於いて」の例では、「に」と「於いて」が付いた「に於いて（において）」と「お」が語中に入っているにもかかわらず、綴りは「nivoite」と「vo」が用いられている（「に於いては」も同様。ただし、序に1例のみ「Ecclensianiuoite」が見られる。これについて今回はふれない）。

「vo」はまた、複合語の後接語頭にも用いられる。「voite」が「ni」と接続して使われる「nivoite」の場合に、「vo」が形としては語中であっても「uo」にならないのは、「nivoite」が「ni」と「voite」の二つの部分から成る複合語として考えられることにより、こうした複合語中にある「vo」の考え方によるものと思われる。

< 4 > 『日葡辞書』・『ロドリゲス日本大文典』における「於いて・voite」

キリシタン文献のなかには、語を当時口語で一般的に使用されていた形で収録した『日葡辞書』がある。そこに出てくる「於いて」の記述を以下に記す（記述は『邦訳日葡辞書』による）。

Voite. ヲイテ（於いて）

文書中で使われる奪格のプロポジサン (*Proposição*).

→次条.

+Voite. * ヲイテ（於いて）

前置詞.¹⁾ Ni（に）のあとに続いて、「…の中で、…に」の意を示す。例、Soconi voite.（そこに於いて）

¹⁾ 原文は *Proposiçam*. 本条の見出し語に*印が加えてあるので、本篇の同じ語（前条）の説明を改訂する意図のあったことは明らかである。ここで注意されるのは、Niのあとに続けて用いられることを断った点であって、他に Motte（以って）を前置詞とし、Vomotte（を以って）をプロポジサンと注したのと併せ考えれば、この場合は、「於いて」だけを切り離したものは前置詞とし、「に於いて」の形は奪格のプロポジサンに相当すると説き分けようとしたかとも推測される。ローマ字綴では、例文に見られるように、niは名詞に直接し、voiteは離して書く。すなわち、「に」は名詞の奪格に立つことを示す助辞であり、それにさらに葡語の前置詞に相当する「に於いて」が添わったものとして取り扱ったのである。補説6参照（＝…これによって「に於いて」の形で葡語の前置詞 Em に相当する機能

をもつことを明らかにしたもので、本篇・補遺を合わせて、‘に於いて’が奪格のプロポジサンであることを示している。…）。

→Iefini～；Nomisonji, zuru.

なお、見出し語「Vomotte」は「奪格のプロポジサン」とされ、以下のような注記が付いている。

‘を以って’は、道具や手段方法を示す点で名詞の奪格の用法に属し、葡語の前置詞 com や em に相当する意味を示すので、これを奪格のプロポジサンと呼ぶ。Motte (以って) の条では、Motte の部分だけを切り離して取り扱い、葡語の前置詞 com や per にあたると説いたが、本条ではローマ字表記で一般に一続きに Vomotte の形で用いられる事実に基づいて、この形で掲げ、品詞名も N 部以下で採用したプロポジサンに従ったものである。

ここで、前置詞、後置詞、プロポジサンについて少しみておく。

『日葡辞書』では、日本語の格助詞およびそれと同じ機能をもつ若干の語に、前置詞 (Preposição)、後置詞 (Posposição)、プロポジサン (Proposição) という三種の品詞名が注されている。いずれも、それらの日本語 (格助詞その他) が、ポルトガル語のどのような語によって言い表されるかを考え、そのポルトガル語の品詞を日本語に準用したものである。

日本語の格助詞またはそれに準ずる連語のうち、ポルトガル語の前置詞に相当する意味機能をもつものを特にプロポジサンと呼んだものと解せられる。

一方、当時の文法書である『ロドリゲス日本大文典』における「於いて」は、「motte (vomotte)」と同様「後置詞」を説明している箇所に入っている。しかしこれは、「名詞に対して後置する」ということであり、その意味がポルトガル語の前置詞に相当する、ということである。

○ 後置詞に就いて

○後置詞は‘よみ’か‘こゑ’かである。その何れも名詞に対して後置され、その意味が我々の前置詞に相当する。その中のあるものは本来実名詞であって、他の実名詞と同じくあらゆる格辞をとる。他のあるものは動詞の語根又は分詞であって、その本源の動詞の支配する格を支配する。又あるものは純然たる助辞である。又その中の一部は格辞の No (の) をとり、他のものは Ni (に) をとり、又他のものは全然とらない。

○ No (の) を支配するもの

(省略)

○ 同じく ‘こゑ’ のもの

(省略)

○ Ni (に) を支配するもの

Voite (於いて)。Voiteua (於いては)。Totteua (取っては)。関しては。
Buppô gacu suru tomogarani voiteua, aruiua fifō xi, aruiua queōman
su. (仏法学する輩に於いては、或いは誹謗し、或いは驕慢す。)

○ 対格に相当して格辞を支配しないもの (名詞と次の後置詞とが直接に接続して、その間に助辞を挿入しないもの。)

(省略)

○ 奪格に相当して格辞を支配しないもの

Ni (に)。Nite (にて)。De (で)。Niuoite (に於いて)。 場所。

Nite (にて)。De (で)。Vomotte (を以って)。 道具。

また、「後置詞の構成」という項目において、「○Voite (於いて), Voiteua (於いては), Totteua (取っては), Itatteua (至っては)」という見出しはあるが、そこに、「○これらは副詞の条で取扱ったので、そこに述べてある事を見ればわかる。」とある^(注3)。

なお、「motte」に関しては、一般的な用法としては、「実名詞の後」また「動詞の直接法の後」に「vo」を伴った形で置かれる、と記されている。

今までみてきたように、『日葡辞書』・『日本文典』のなかでの「に於いて」のローマ字綴りのものは、そのほとんどが、「~ni voite」のように、「に」と「於いて」が分かち書きされ、「お」には「vo」が用いられている。

< 5 > 『天草版伊曾保物語』・『天草版金句集』における「於いて・voite」

『Feiqe』の後ろには、『天草版伊曾保物語 (Esopo no fabulas) (以下、Esopo)』と『天草版金句集 (Qincuxū) (以下、Qincuxū)』があり、この三書で合綴本となっている。この二書も『Feiqe』とほぼ同時期にできた作品である。『Esopo』と『Qincuxū』における「に於いて (は)」のパターンの傾向もみていく^(注4)。それぞれのパターンは以下のようなになった。

(調査範囲には、『Esopo』本文前の扉・読誦の人へ対して書す、『Qincuxū』五

常を含む)

『Esopo』全10例

～ni voite 2例

～nivoite 1例

～ni voiteua 6例

～nivoiteua 1例

『Qincuxǔ』全1例

～ni voiteua 1例

『Esopo』・『Qincuxǔ』とも、「に於いて」の例はすべて、前の部分に「ni」が後接する「～ni」の形をとっている。そして、その多くは、「ni」と「voite/voiteua」が離れている「～ni voite/voiteua」のパターンとなっている。

『Esopo』中にみられる「～nivoite/～nivoiteua」の例については、それぞれ「Coconivoite (ここにおいて)」と「……, laarunivoiteua, …… (……、さあるにおいては、……) であり、特に「laarunivoiteua」はこの単位で接続詞と扱われているように(『エソポのハブラス』本文と総索引：索引篇)、熟合度の高い特殊なものと考えられる。そのため、この2例の「～nivoite/～nivoiteua」は、特殊な例と言えるだろう。

先の『Feiqe』本文中の例の傾向と比較してみると、『Esopo』・『Qincuxǔ』よりも『Feiqe』の方が、分かち書きのパターンにばらつきが見られる。これは、『Feiqe』では、分かち書きの単位が本文中で変化していったように、まだきちんとした形で定まっていなかったためと思われる。それが、本文後半で助詞等が前にくる語に接続するようになり、語の単位がまとまっていった。巻第四に入って「に於いて (に於いては)」の変化にもそれがあらわれていたが、『Esopo』・『Qincuxǔ』にも「～ni voite/～ni voiteua」となる傾向がみえていた。『Esopo』・『Qincuxǔ』は、この『Feiqe』の本文(巻第四)後半の傾向を引き継いでいき、「に於いて (に於いては)」を含め語のまとまる傾向が強くなっていったことをあらわしているように思われる。

< 6 > 考察

以上、『Feiqe』本文中にあらわれた「於いて」を、よく使用される「に於いて (に於いては)」という形で考え、その分かち書きのパターンについてみてきた。また、辞書や文法書における「於いて (に於いて)」の記述、さらには合綴

されている『Esopo』と『Qincuxū』の中の傾向もみてきた。また今回は、言語変化の背景として、中世語の特徴についても触れてきた。そこから考えられることを述べてみたいと思う。

まず、『Feiqe』本文中に、分かち書きのいくつかのパターンがみられたことについてである。先に紹介した多くの語が掲載されている『日葡辞書』や文法書である『日本文典』は、『Feiqe』『Esopo』『Qincuxū』三書合綴本が完成した後には出版されたものである。つまり、『Feiqe』が編纂された当時は、まだ確立した語・文法規定があまりなかったのである。そのために、編纂者自身の、「語」に対しての「何を語（一語）としてみなすか」という意識に‘ゆれ’があったのだと思われる。辞書や文法書のように「～ni voite」の形が確立したのは、少なくとも『Feiqe』編纂後ということになるだろう。したがって、確立した規定がないなかで行われた（語に対する捉え方があらわれる）分かち書きに、いくつかのパターンが出たのである。

次に、こまかく分かれていた分かち書きの単位が、その語を使っていくうちに大きくまとまっていった過程についてである。「に於いて」も、最初は「～ni voite」と、すべて細かく分かち書きをしていた。しかし、『Feiqe』は外国人宣教師の日本語学習のテキストという大きな目的を持つ。特に、布教活動のため「話す・聞く」という実践的な日本語学習をするためのテキストなのである。そのため、より実際的な日本語でなくてはならない。すぐに使えるものでなくてはならない。普通に会話をする際に、「～／に／おいて／…」と間をあけることは少なく、前の語から続けて一気に用いるという実際から、分かち書きの単位もそれに即していったと考えられるだろう。

また、<1>でもふれたが、イエズス会の日本語観察が進んだことも大きく影響していると思われる。今まで自国の語に対応する日本語を当てはめていたことにより、前にくる名詞と切り離して明確化していた。しかし日本語観察が進んでくると、日本語は、実質的意味を持つ語や語幹に機能語や接辞を付けてさまざまな文法範疇を表す膠着語に属する言語であるために、その実際に表記から近付けたのである。また、その形は、日本人が話すのを聞く場合、また、宣教師が日本語を話す場合に実際的であり、よりスマートであったのである。このために、分かち書きの単位をまとめていく——特に、前にくる語（部分）に「に・ni」を接続させる——方針をとったと考えられる。

最後に、『Feiqe』内において、「を以って」がその使用の実際から「vomotte」というひとつの単位（品詞）になったのに対し、「に於いて」は（一部をのぞき）「nivoite」という形をとらなかったことについて考えてみたい。

「を以って」の場合は、『Feiqe』中で、その使用の実際から、「以って」は必

ず「を」を伴っていたために、「vo」と「motte」を二語として切り離して表記せず「vomotte」を一語として扱うようになった。それに対して、「に於いて」は、あくまでも、名詞に直接する助辞「に」にポルトガル語で言うところの前置詞である「於いて」が接続したものであって、熟合度としては「を以って」よりも弱かったために、完全に「nivoite」という一語としては考えられなかったのではないか。

これは、「に於いては」でも同様であり、「於いて／於いては」は「に」を伴って使われるものではあるが、少なくとも『Feiqe』内においては、「に於いて(は)」を一つの品詞として独立するほどには熟合の度合いは強くなかったのではないかと考える。

したがって、「nivoite (ua)」については、『Feiqe』序・巻第四に見られる一部や、『Esopo』中に見られたような前の語とのつながりが強く用法が固定した「ここにおいて」や「さあるにおいては」のような一部の語のみに見られたのである。

結果として、『Feiqe』本文中では、「に於いて(は)」は、「を以って・vomotte」のように完全に一つの独立した品詞としては認められなかったが、本文全体を通して見られたその変遷から、「に於いて(は)」の分かち書きの単位がまとまっていく傾向が見られた。それは、『Feiqe』編纂当時の日本人の日本語使用の実際と、それに伴うイエズス会の日本語研究の成果のあらわれといえるだろう。

今回は、『Feiqe』での分かち書きについて、特に「於いて」に焦点をあてて調査・考察を行なったが、その作業の中で、『Feiqe』編纂の過程における編纂者の一語意識の‘ゆれ’が、本文全体を通して見られた「於いて」の分かち書きの変化の姿にそのままあらわれていたように思われた。このような姿が明らかになったのは、『Feiqe』が、「分かち書き」を必要とするローマ字本であったからである。あらためて、キリシタン文献である『Feiqe』の貴重さを強く感じる。今後は、さらに調査の幅を広げ、「分かち書き」についての考察を深めていきたい。

(注1) 『天草版平家物語』での分かち書きについて(根岸亜紀・『日本文学研究』第40号・2001.2)による。

(注2) この項で参考にした『Feiqe』のテキストは、以下のとおりである。

『天草版平家物語対照本文及び総索引』本文篇・索引篇(江口正弘・明治書院・1986.11.20)

「天草本平家物語資料大成」CD-ROM(江口正弘、溝口博幸 編・尚文社出版・2005.8)

(注3) 『ロドリゲス日本大文典』第二巻 副詞の構成には、以下のようにある。

副詞 VOITE (於いて), VOITEVA (於いては),
Voiteuoya (於いてをや), Totteua (取っては),
Itatteua (至っては) に就いて

○この副詞 Voite (於いて) は、助辞 Ni (に) を伴ふ与格又は奪格を支配する。
(省略)

○その用法と意義とは本来条件を示す副詞であって、若しも……ならばといふ事を意味し、Ni (に) を語尾とする動詞の接続法の後に置かれる。(省略)

○附則一

○実名詞の後に置かれたものは、それ自身で Naraba (ならば) といふやうな、存在動詞の条件法となる。(省略)

○第二。ある場所にあつてといふ意、即ち Ni (に)、Nite (にて) の意を示す。(省略) 普通には助辞 Va (は) をとらない。

○第三。Maxite iuanya (況していはんや)、Icadeca (いかでか)、Icani iuanya (如何に況や) 等の先行する句の終にこれを置く。それには Voya (をや) が添はる。(省略) 副詞 Saye (さえ) の条を見よ。

○第四。文の言ひ方によっては、これに就いて、これこれの事に関しては等の意を示す。(省略)

○附則二

○Totteua (とっては) は動詞 Toru (取る) の分詞であつて、実名詞の後に置かれ、Voiteua (於いては) と同じ支配関係を持ち、その第四の意義と同じである。(省略)

○附則三

○Itatteua (至っては) は動詞 Itaru (至る) の分詞であつて、次の例でも見られるやうに、Voiteua (於いては) や Totteua (取っては) と同じ意義及び支配関係を有する。(省略)

○Itatte (至つて) は往々にして、ある場所にある意の Ni (に) と同義の事がある。(省略)

(注4) この項で参考にした『Esopo』・『Qincuxǔ』のテキストは、以下のとおりである。

『Esopo』…『エソポのハブラス本文と総索引』本文篇・索引篇(大塚光信、来田隆・清文堂出版・1999. 2. 25)

『Qincuxǔ』…『天草版金句集本文及索引』(金田弘・白帝社・1969. 11. 10)

<参考文献>

『室町時代語の研究』(鈴木博・清文堂出版・1988. 11. 30)

『中世語論考』(山内洋一郎・清文堂出版・1989. 6. 30)

『邦訳日葡辞書』(土井忠生、森田武、長南実・岩波書店・1980. 5. 29)

『日本文典』(原著者: J. ロドリゲス, 訳注者: 土井忠生、三省堂・再版1950. 9. 10)

『ロドリゲス日本語小文典』下(訳者: 池上岑夫・岩波書店・1993. 8. 18)

『天草版金句集の研究』(吉田澄夫・東洋文庫・再版1969. 1. 20)

『古語大辞典』コンパクト版(中田祝夫、和田利政、北原保雄 編・小学館・初版1983. 12.

10・コンパクト版1994. 1. 1)

『角川古語大辞典』第一巻(中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義・角川書店・1982. 6. 10)

『日本国語大辞典』第二巻(日本国語大辞典 第二版 編集委員会、小学館国語辞典編集部

編・小学館・第二版2001. 2. 10)

『漢語林』(鎌田正、米山寅太郎・大修館書店・初版1987. 4. 1・第四版1990. 4. 1)

(このほか、前出『天草版平家物語』での分かち書きについて」および「『FEIQEMONO GATARI』での分かち書き」(根岸亜紀・ローマ字の研究会(おはなし会)・鈴木康之研究室にて・2000. 7. 7)を、参考とした。)

※本稿執筆にあたり、わたくしをキリシタン文献研究の世界に導いてくださった市井外喜子教授に、多くのご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。